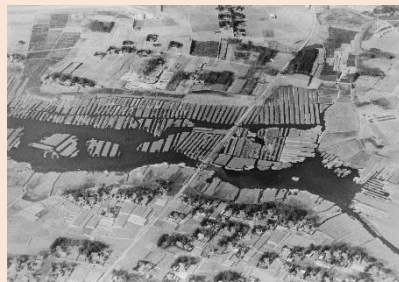


【近藤沼 ストーリー】

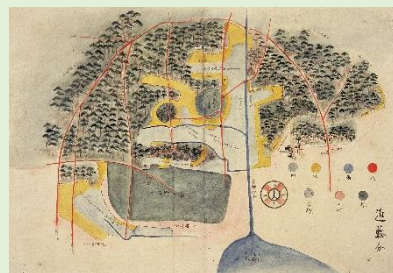
館林市の南西部にある周囲約 2.5 kmの沼で、明治時代に造成された櫛の歯状の水田と水路が存在した。沼底の土を掘り上げて造ったことから「ホリアゲタ」(別名キロコボリ)と呼ばれ、多々良沼同様「実りの沼」として暮らしを支えてきた。沼辺に建つ「吉田丑五郎翁碑」がその歴史を伝え、周辺の農地に名残の水路を見ることができる。



【近藤沼の歴史】

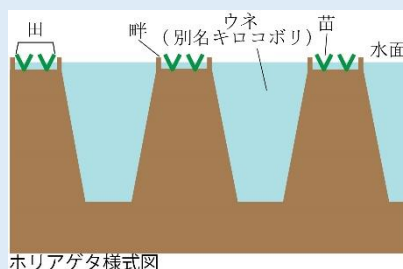
近藤沼は、古くは八重笠沼(太田市)・板倉沼(板倉町)・多々良沼・城沼とともに、東毛の五沼と称された。沼の南側は微高地の自然堤防地形、北側は水田のある湿地帯になっている。

館林市の「近藤」は、慶長19年(1614)に領主が近藤秀用(徳川家臣・井伊家の元寄騎)となったとき、近藤と呼ばれるようになったという地である。そこにある沼ということで「近藤沼」と呼ばれるようになったと考えられる。



【特徴的な景観「ホリアゲタ」】

ホリアゲタ(掘り上げ田)は、岸から縦に細長い溝(クリーク)を掘り、掘った際に生じた泥土を溝と溝の間に積み上げて水面より上に地面を作り、そこを田にするという農法。干拓や埋め立てが困難な沼地で田を作り、さらに溝により水路を確保するための独特の農法である。地元の一部ではホリアゲタの溝を「キロコボリ」という。



ホリアゲタ様式図

ホリアゲタの造成に尽力したのが、下三林村の村民吉田丑五郎(1839~1901)である。丑五郎は明治22年(1889)と明治30年(1897)に近隣の村と協力して近藤沼の開墾を行った。丑五郎は公共心が強く、産業発展と庶民幸福を願って、荒廃していた近藤沼に私財を投じて開発し、その生涯を捧げた。このとき造成されたのがホリアゲタである。



【昭和50年代の開発】

昭和46年(1971)、近藤沼の中央を南北に通る農免道路が完成した。これを機に、新しい時代の農業経営に対応できる基盤整備を必要とする声があがり、地盤造成・圃場整備・用排水分離・乾田化を目指す開発が計画された。埋め立て・整地の採土地は沼部とし、灌漑は用水源を近藤沼として、揚水機場の設置と用水域全てのパイプライン化が図られた。昭和50年(1975)に着工し、56年に竣工した。この整備後、近藤沼の周りには公園が整備され、釣り場として多くの釣り人が訪れている。近年、バーベキュー場も整備された。

